

自分の日常を振り返って観てください。行動したから自分がどうやりたかったかが分かる。絵をかいてみて、自分が何を描きたかったか分かる。話してみても自分が何を思っていたか、どう思っていたか分かる。つまり、「悲しいから泣くのでなくて、泣くから悲しいのだ」という心理学の有名な言葉を思い出します。そうなんです、長い話とか物語を書くときに始めからストーリーが頭にあることはまれです。書きながら、順々に浮かんでくる言葉を紙に書いているだけです。でも、ちょっとした物語になっている。起承転結が整ったものになっている・・・ではないですか。「神が私に書かせた」と感じる幸福の時です。

前頭葉の運動前野と補足運動野は行動のプランニングをするところだそうです。前頭葉の言語野は言葉を生成するところだそうです。どちらも、いろいろの事象、見通し、事象間の関係、すでに確定した行動、単語列の情報を調停して最終的な結果を紡いでいく機能を担います。まさに、様々なオブジェクト間の重み付け投票法で行動、思考をプランニングしているのです。この辺の機能は錯綜したデータでしかなく、明確な行動とか思考として認識できるのはその表出結果を自分自身で認識した時点なのです。

布団から炬燵に移行するとき、まず浮かぶのは「炬燵にいて温まろう」でしょう。布団があるからかたし、炬燵の電気を入れ、温まったら足から潜る。これらを行き当たりばったり、意識せず行っていきます。それは大人にはあらかじめ大まかなストーリーが知識オブジェクトとして備わっているのでしょう。途中で、「朝の食事つくらねば」と思いつくことも時間からの連想で起きることです。どちらが今重要かを判断して、行動を継続するかスイッチするか決定します。思い悩むこともあるでしょう。それも「思い悩もう」という意思の下ではありません。自動的に思い悩むのです。思い悩んで初めて、自分はこんなことにも悩む存在であることを発見するのです。

あと前頭葉には数学的能力が備わっていると思うのですが。その最たるものは1対1対応の能力ですね。計数能力の基本です。この計数能力を拡大して、数学的、論理的能力が構築されていく。ブール代数とかですね。集合論とかですね。様相論理とかですね。一階述語論理とかですね。言語の文法なんかも構築されているかもしれません。文法を習ったインテリとかですね。